SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

国語科 授業実践

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2019-08-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00026737

実践事例３

１　題材名　　「素顔同盟」
　　－象徴表現から味わう－

２　題材観

(1) はじめに

「平成25年度 小学生・中学生の意識に関する調査」の青少年（小・中学生）を対象とする調査において「友達との付き合いがめんどうくさいと感じることがある」という項目がありました。その結果は中学生が26．２％というもので，４人に１人がそのように感じているという状況があります。同じ調査で小学生の値が13．９％だったことを考えると，中学生になってから人と接することに煩わしさを感じるケースが増えていることがわかります。

子どもたちは附属中学校で生活する中で，本音で語り合うことを大事にしてきました。そうした経験を経た３年生は，本音で語り合うことで相手を傷つけてしまったり，それが原因で仲間と上手くかかわれなくなったりしてしまわないかを考えるようになり，本音で語り合うよりも，本音を避けて話をし，波風を立てずに生活しようとしているような姿が見られることもあります。中学３年生とはそのような年ごろなのでしょう。

すやまたけし作「素顔同盟」は，そうした生活とリンクする部分があるため，子どもたちにとって身につまる，まさに切実感を覚えるものであると考え，題材としました。

(2) 象徴表現から読み解く

すやまたけし氏は，自らのメッセージ性を出すための手立てとして象徴表現を多用しています。（象徴表現とは，直接的にはつかみにくいことを表現，または，構成によって暗示的に読み手に伝えることです。）それらを分類すると，「①仮面」「②対比」「③比喩」となります。子どもたちがこれらの象徴表現に着目することは，筆者が意図的に用いた言葉を根拠を基にして，自らの“読み”（考え）を形成するという言語活動につながります。また，そのように象徴表現を味わい，仲間とともに語り合うことで国語科ならではの文化を味わい，思考力を育むことにつながります。

①仮面を被る設定から考える

アノニマスというハッカー集団がガイ・フォークスという人物の仮面を被り，活動を行うというニュースを見ました。ハッキング行為そのものよりも，集団で同じ仮面を被ることに異質なものを感じた記憶があります。そうした仮面から与えられる違和感を考えると，「仮面」にはある種の力があると言えるのではないでしょうか。

【ガイ・フォークスの仮面】

「仮面」を被ることは，自らのもつ表情や感情を統一することにつながります。集団で同じ仮面をつけるということは，外見的にも内面的にも個性が薄くなることを意味するのでしょう。私が最初に感じた違和感は，そうした没個性にあるかもしれません。

また，そうした集団では，個人よりも集団が大事にされます。そのため，集団において没個性化がなされると個人的アイデンティティよりも社会的アイデンティティが顕現化されるという状況に陥り，自分の考えをもったり述べたりすることが難しくなってしまいます。

「素顔同盟」では，仮面は以下のように表現されています。

- 偽物の笑顔
- 人工的すぎる
- 口もとだけしか笑っていない。その他の部分は，目も頬も無表情ですらある
- 無個性な笑顔はみんなと同じ
- 統一された変化のない笑み

また，仮面をつけることのメリットは以下のように語られています。

- 人と同じであることは幸福なのだとみんなは言う
- 市民が仮面をつけだしたことによって，人と人との摩擦はすっかりなくなり，平穏な毎日を送れるようになった
- いつもニコニコ，平和な世界，笑顔を絶やさず，明るい社会。仮面は私たちに真の平和と自由を与えてくれた

ここでは，常に笑顔の仮面をつけることで，社会は笑顔であふれ，真の平和と自由を与えられたと設定されています。

そうした社会の象徴が「仮面」であり，独特の世界観を生みだしているのです。

仮面の世界では，私たちが普段気づかぬうちに使い分けている仮面（ペルソナ）のようなものは存在しません。この社会で生活していく人間は，ずっと同じ仮面を被り続けなければならないからです。ここから，作者が一般の世界と「素顔同盟」の世界とを隔絶させた極端な世界（メルヘン）を描いていることがわかります。

後の「対比」ともつながってきますが，そうした中において友達は違和感を得ていません。しかし，「僕」は自分の感情を押し隠すことに違和感をおぼえます。

「仮面」という設定を設けることにより，作品のもつ世界観を有効に示すことに成功するとともに，自らのアイデンティティに疑問を抱き始めた「僕」の存在が際立つようになっています。

②対比をとらえることから考える

本文を見ると，多くの対比がなされていることが読み取れます。多重に構造化された世界が，読者に多くの視点を与えます。

・「仮面の世界」と「素顔の世界」

意味段落の２段落目までに「僕」を中心とした仮面の世界が描かれ，３段落目で「僕」のいる世界とは異なる素顔の世界の存在を示し，４段落目以降で「女の子」を登場させて素顔の世界を描いていることが読み取れます。それぞれが意図的に構成，対比されることで，より世界観をイメージしやすくすることに成功しています。

・「僕」と「社会の先生」と「友人」と「女の子」

仮面の世界を生きる中で，その世界に疑問を抱く「僕（マイノリティ）」と，その世界のメリットを説明する「社会の先生（社会の代弁者）」，そうした世界で何の疑問ももたずに生活する「友人（マジョリティ）」。そして，世界から飛び出そうとする「女の子（革命家）」の存在がそれぞれ登場人物として対比されています。登場人物がどのような考えをもっているのかを考えることで，それぞれが役割をもって登場していることがわかります。社会の先生が伝える講義型の授業をしている点にも仮面の世界の風景が象徴されています。

・人工物と自然

高層ビルの街と対岸の森林地帯の対比です。川を隔てていながらも川岸にはイチョウが等間隔に並んでおり，自然の世界に近づくにつれて素顔の世界に近づくことも読み取ることができます。このような読み取りをすることにより，女の子が川岸のイチョウの木の下で仮面を外したことにも整合性がとれます。

・僕と女の子

僕が仮面の世界を味気ないものと考えていたとき「寂しい時には寂しい顔を，悲しい時は悲しい顔をしたかった」と述べています。その後，女の子が登場したときに，彼女は「寂しそうで悲しみさえたたえていた」表情をしていたと描写され，２人が対比されています。そのような表情を見て僕は女の子のことを「美しかった」と感じます。そこには，僕は多彩な感情を表に出したいという僕の欲求が表われているのではないでしょうか。

このように考えると「僕と女の子は単純な対比の図式ではない存在として描かれている」と読み取ることもできますが，後半は僕が素顔の世界へと一歩を踏み出せるか踏み出せないかの視点で僕と女の子が対比されています。

・その日の僕と次の日の僕と数週間後の僕

僕が女の子と出会ったとき，彼女は自分と同じ側の人間だと気づき，同類であるという認識をしていました。しかし，その日の夜に声をかけなかったことを悔やみ，眠れない時間を過ごすこととなります。次の日は彼女に会おうと再び公園に赴きますが，出会えません。数週間後には声をかけられなかった僕が，ためらわず彼女に会おうと上流へ向かうという思いに変化していることが見て取れます。(素顔同盟は上流の対岸にあるところがポイントになりそうです……)

このように対比することによって，「僕」の心情の変化が明確なものとなります。

・女の子の仮面とその他の人の仮面

上流から流れてきた仮面は，どれも同じ表情の仮面です。それにもかかわらず，僕は上流から流れてきた仮面は，例の女の子の仮面に似ていると思い，拾い上げてから間違いなく彼女の面であると確信します。

彼女の仮面と他の人の仮面とを対比してみると，差違はないように感じますが，推察すると素顔の世界を象徴する「真っ赤」に色づいたモミジとともに流れてきたものが仮面ですから，本当の思いを表出した女の子のものであると僕は判断しました。また，そうであってほしいという僕の希望がそこに表われているのかもしれません。

③比喩表現から考える

この作品では，比喩が効果的に用いられています。代表的なものは仮面の世界と自然の世界であり，その境界線を川として示しています。整理す

ると以下のように分けられます。

【仮面の世界】	【境界線】	【素顔の世界】
・街	川	・自然保護区
・高層ビル		・森林地帯
・人工物		・自然
・銀杏		
→等間隔→黄金		・赤や黄の色彩
→笑顔のみ		→多種の感情
→仮面		→素顔

上のように「仮面の世界」と「素顔の世界」とを比べてみると，それぞれが対照的なものであるにもかかわらず，「黄金色」が共通していることがわかります。仮面の世界で描かれる唯一の自然物はイチョウの木から落ちる黄金の葉のみですが，素顔の世界には「赤」があるなど，色彩に富んでいるとの表現がなされています。

こう考えると，黄金色は笑顔を表していると推測できます。「笑顔」はどちらの世界にも存在しているからです。赤や黄金色の色彩は笑顔も含めた人間の多種の感情，表情を示していると考えられそうです。

では，「赤」とは何を示しているのでしょうか。上のように考えるのであれば，「赤」は本当の思いを喩えていると考えられそうです。本文の終盤に「川の水は冷たそうにゆっくりと流れていた。真っ赤に色づいたモミジの一群れが過ぎていった。」という文のあと，彼女のものらしい仮面を発見し，彼女に会うために上流に向かうという描写があります。そこからも，僕の本当の思いが「赤」で表現されていることがわかります。

感情が「笑顔」という一つに決められた街と，感情が「多彩」であるという自然保護区の比喩（と対比）が川を隔てて象徴的に表現されることにより，仮面の世界から感情のある世界の存在を顕在化させることに成功しています。

以上のように，子どもたちが「象徴表現」を基にして読み取り，象徴表現に込められた意図を語り合うことを通して，作者が伝えたかったことを味わうことができるのではないでしょうか。

(3) 作者の伝えたかったこと

作者が「素顔同盟」で読者に訴えかけたかったことはどのようなことでしょうか。多くの読者は「仮面を外して自分らしく生きなさいということでしょ？」と考えるのではないでしょうか。

しかし，この世界で生きる私たちは仮面（ペルソナ）をもって生活しています。家族と接するときの自分，友人と接するときの自分，新たに出会う人と接するときの自分など，きっと人に応じて接し方や話し方を変える，つまり，仮面を使い分けているといえるのではないでしょうか。また，同じ相手であっても接しているうちに対応の仕方を変え，自分の中にいくつも内在する仮面の中から適した仮面を選択しているということもあるかもしれません。そうしたことは多かれ少なかれ，誰もが行っていることでしょう。仮面を外して生活することは難しいのです。

私は，本文の最後にある，「僕」が川という一線を越えず，“上流”に向かって歩き出すという表現に作者からのメッセージがあるのではないかと考えます。そこには，自分の考えたことを隠さず，自由を求めて行動することの大切さと，本心を出して生活することによって人と人の摩擦が増えないようにした大切さといった両面を知る僕の考えが表されているのではないでしょうか。“上流”は，現実（仮面の世界）と理想（素顔の世界）といった境界線のない世界を象徴的に表しているのでしょう。

こうした考察は一例に過ぎませんが，子どもたちが題材を読み深め，それぞれ読み取った作者の伝えたかったことを語り合う中で，言葉の感覚を磨いていく子どもたちの姿を期待しています。

参考文献：すやまたけし（1988）『火星の砂時計』サンリオ
田中実／須貝千里（編）（2001）『文学の力×教材の力』教育出版

３ 学習指導要領との関連

C 読むこと

イ 文章の論理の展開の仕方，場面や登場人物の設定の仕方をとらえ，内容の理解に役立てること。

C 読むことの言語活動例

ア 物語や小説などを読んで批評すること。

４ 題材構想（全４時間）

(1) 出会い：象徴表現と本文 （１時間）

授業者は「象徴表現」に注目させるために，以下のような子どもたちに馴染みがあり，象徴している事柄がイメージしやすい言葉を子どもたちになげかけました。すると子どもたちは，その言葉にどのような意味が含まれているのかを考え，以

下のように発言しました。

【鳩】　… 平和
【赤】　… 社会主義，情熱
【青】　… 資本主義　　【白】　… 無個性
【表】　… 表面的　　【裏】　… 裏面的
【北】　… 寒い　　【南】　… 暑い
【上り】… 東京方面
【下り】… 東京の反対方面

授業者は,「赤と青と白」や「表と裏」,「北と南」や「上りと下り」について確認する際，簡易な図（⇒や⇔）を用いて対比させながら，象徴表現について確認しました。ある程度子どもたちが「象徴表現」に対する理解を示したところで，これから「素顔同盟」という題材を授業で行うことを告げました。そして，本文を子どもたちに配付しました。

授業者は範読をし,「追求の記録」に初読の感想を記入するようになげかけました。その後の子どもたちの「追求の記録」には，以下のような感想や疑問，さらには表現に注目した記述が書かれました。

【内容】
・仮面を被るということは本当の平和につながっているのだろうか
・仮面を被るということは，人の尊厳を失うことにつながる
・作者は，自分の心をさらけ出して，生きられる人になろうということを伝えたかった
・仮面には利点があるが，多様な価値観をおさえる欠点もある
・仮面の存在は，人間関係を築く中で一概に否定できるものでもない
【表現】
・女の子は「悲しみさえたたえていた」表情なのに，どうして美しく見えたのか
・仮面は何の比喩か→自分の感情をおし殺すもの
・赤と黄色の対比は素顔と仮面につながりそうだ
・この物語には対比がたくさん使われている
・最後ためらいもなく素顔同盟の場所に向かっていた行動が，この世界に対する自分の意思表示だったと思った
・僕が川の上流へ行ったのは，同盟に加わりたかったからかな
など

授業者は，子どもたちに「追求の記録」に書いた内容について発言することをなげかけました。そこでは，題材の力も大きく，内容に関する気づきが多く発言されましたが，表現に注目して読み，作者の工夫について発言した子どももいました。

子どもたちから「仮面」と「対比」の内容が出されたところで，今後の授業の流れ（第２時で行う内容）を説明し，授業を終えました。

(2) 「対比」「象徴表現」を読み解く個人追求（１時間）

前時の導入で取り入れた「象徴表現」と授業後に挙げられた「対比」についてそれぞれ確認した上で，授業者は追求用紙を子どもたちに配付しました。

授業者は「対比」と「象徴しているもの」に注目して作者の世界を図で示すようになげかけました。書き始めは何を書けばよいのかわからずにいた子どもたちもいましたが，対比の確認やどのような情景が描かれているのかを挙げていったり，文章中の表現を基にしながら考えたりする中で，対比を用いながら作者が描き出した世界観を明らかにしていきました。

子どもたちが読み解いた「対比」や「象徴表現」には大きく以下のように分類されます。

①【「仮面の世界」と「素顔の世界」の対比】
・「人工物」と「自然」の対比
・「森林地帯」と「高層ビルの僕の街」
・「等間隔に並んでいるイチョウ」と「森」
・「仮面」と「素顔」
・川が境界線になっている
・「社会・警察」と「素顔同盟」
人工物：自由がない，一人一人の個性がない
自然：自由，散在
仮面：偽物の感情，義務，形の上での平和，無個性，平穏，社会的行為（健全な社会），多数派
素顔：自分の意志，権利，変化，反社会的行為
素顔同盟：少数派
コンクリート：容易に越えられない境
公園：支配された土地
黄金色：偽りの笑顔
赤や黄の色彩：人間の喜怒哀楽
橋がない：自分から変えられない世界

②【「僕」と「社会の先生」と「友人」の対比】
・「僕」と「先生」
・「僕」と「市民」
・「僕」と「先生」と「みんな」
社会の先生：洗脳，権力の強さ，「没個性」を助長する現代社会の風潮そのもの

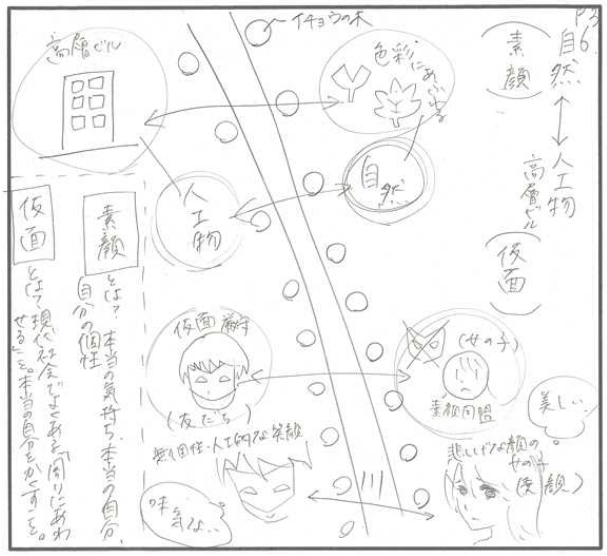
③【「僕」と「女の子」の対比】
・「僕」と「女の子」
・「味気なさ」と「美しさ」
女の子：仮面をつけることに対する反発，行動することの意味を伝える存在，勇気を示している
美しさ：仮面にできない表情

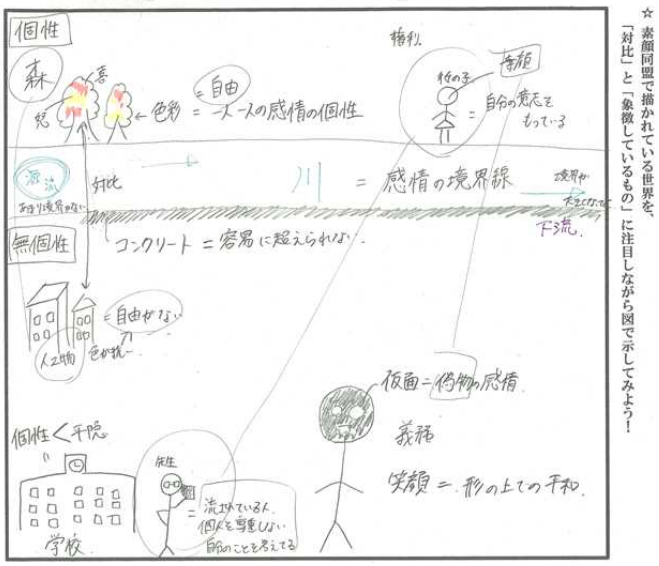
④【「変化した僕」と「僕」の対比】
・「本当の僕（涙）」と「鏡に映る僕（笑顔）」
・「女の子と会った日の僕」と「数日後の僕」
・「疑問を抱く僕」と「仮面を外した女の子の僕」と「仮面が浮いているのを見た僕」
イチョウ：未だに変われない自分
モミジ：自分の意志を固める

⑤その他の対比
・「今の社会」と「昔の社会」
個人の自由が保障されているかいないか

・「上流」と「下流」
真っ赤に色付いたモミジ：社会に対する怒り，自由の素顔同盟が迫っている
下流：仮面，無個性，境界の幅が広がり仮面の世界が広くなる
上流：素顔，個性，人間としての源流，境界の幅が狭くなる
上流へ向かって歩き出した：自分から変えていくこと
など

子どもたちは自らの読みを基に象徴しているものを考えていきました。比較的対比が読み取りやすい①の対比に集中していましたが，象徴表現を形成する充分な活動ができたことが考えられます。





(3) 問いの共有　（１時間）

子どもたちが追求した内容を基に，対比構造をわかりやすくするために「素顔同盟マップ」を作成しようと子どもたちになげかけました。

授業者は，対比関係を図示しやすいよう簡単な地図を描き，子どもたちが読み取った対比と，象徴しているものを挙げやすいように準備しました。

・人工物と自然の対比がある
・「僕」と「彼女」は，対比できそうだ
・「僕」と「社会の先生」，「友人」の対比もある
・等間隔に並んだイチョウと，森との対比がある。公園はコンクリートに囲まれ，支配された土地ということを示している
など

はじめは対比について挙げていく子どもたちが多くいましたが，象徴している内容を挙げていく子どもたちが多くなっていきました。

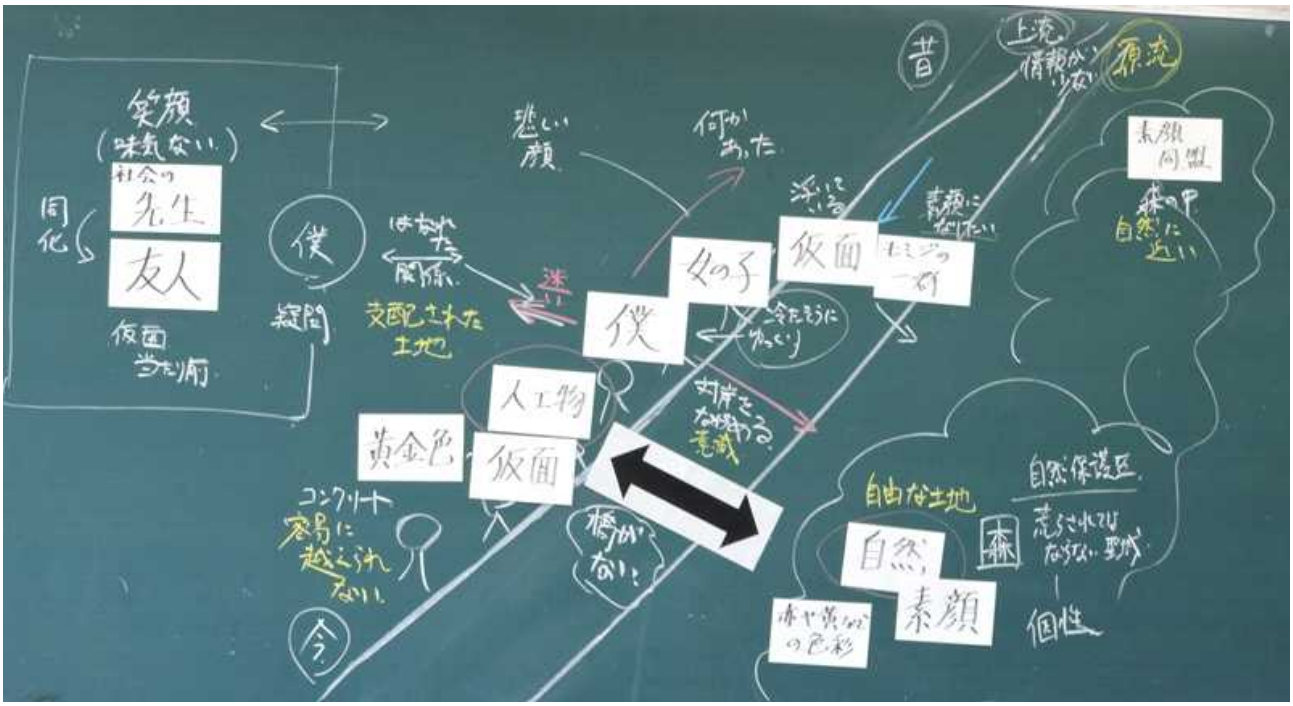
・川と川は境界線になっていて，仮面の世界と素顔の世界とを分けている
・川を渡るためには，仮面を置いていく必要がある
・川から流れてくるモミジや仮面は，それぞれの世界を象徴している
・時間の流れと川の流れが同じになっている
など

横の対比が多く挙げられていき，次第に対比の境界として川の流れや，川に浮かぶ仮面や流れていくモミジの一群れなどの「川」についての話題

に話が進んでいきました。

そうしたときに，「上流って何を示しているのだろう」と子どもから疑問が出されました。

そこで授業者は，他の対比や象徴していることを子どもたちに挙げてもらい，「『上流』とは何を示しているのか」ということと「『上流に向かって歩き出した』とはどのようなことを示しているのか」ということを次時に考えていくということを告げ，授業を終えました。



(4) 象徴表現を味わう　　（２時間）

まず，授業者は前時で見いだした図を子どもたちとともに確認しました。そして，図を見ながら「『上流』とは何を示しているのか」ということについて子どもたちとともに理解を深めていきました。

- 上流は川の幅が狭くなるので，仮面の世界と素顔の世界に行き来しやすい
- 上流は手つかずの自然が多いことから，神秘的な場所であることが考えられる。
- 川の流れは時間の流れだったから，過去が上流にあると考えられる
- 生まれたばかりの場所，仮面をつけない世界を示している
- 人間本来の姿，「源」を示しているのではないか

など

語り合いをしている中で，子どもたちの思考は上流が仮面を示しているという方向へ進んでいきました。

そうしたときに，川を隔てて仮面の世界と素顔の世界が分かれているにもかかわらず，素顔が上流にあるということはおかしいという疑問があがりました。そうしたときに子どもたちは，川を中心に対比関係を振り返り，上流は「源」というとらえがあり，素顔の世界と仮面の世界の両方が含まれているという思考に進んでいきました。

「上流」と「源流」が違うことと，源流に「僕」が近付こうとしているということを確認したところで，授業者は「『上流へ向かって歩き出した』ということが何を示しているのか」ということを考えていくようになげかけました。

子どもたちが先ほどの「上流」の象徴していることを踏まえて「仮面の世界を抜け出すために，人間がもつ本来の姿，源へ向かっている」ということを見いだし，自分たちなりの“読み”をもって授業を終えました。

子どもたちに授業後「象徴表現」について尋ねたところ，以下のような気づきがなされていました。

- 直接的に表現しているわけではないから，個人でそれぞれ違った解釈ができて，作品の読みのおもしろさが出て世界が広がる
- さまざまな角度から作品を見つめることができるので，多くの視点から作品を楽しむことができる

など